

# 伊藤永之介と〈戦中〉・〈戦後〉の農村社会

高橋秀晴

## 一 農民観

一九三二年の東北大凶作を契機として「本当の意味で絶えず農村に注意をむけるやうになつた」伊藤永之介は、以来、一九五九年七月二六日に亡くなるまで、一貫して農村を舞台にした小説を書いた。定観測を続けたという意味において、日中戦争・太平洋戦争前後の連続と不連続を考える上で極めて好適な作家の一人と言えるだろう。

永之介は、「農民に対する観念」（『農民の幸福』、国際出版株式会社、一九四八年一月二五日）の中で、かつて農民の純朴さは都会人にとって「一つの田園詩」であつたので一九三二年から一九三四年にかけての東北大凶作に対しては救援の手を差し伸べ同情を寄せたし、日華事変によつて食糧の確保が問題化することで農民の地位の重大さを認識し戦争の激化とともに農村の労力が欠乏してくると田植え・稲刈り等の勤勞奉仕さえして協力するようになったとし、しかし、食糧の配給制度が行われその配給が少なくなつて買出しが始まると、農民像は「冷淡」「狡猾」「強慾非道」といった否定的なイメージを帯びるようになった、と都会人の農民観の変遷について概括している。

一方、同時期に執筆した「戦後の農民文学」（『新日本文学』第三卷三号、一九四八年三月一五日）においては、「観念」に対する〈実態〉について、次のように述べている。

本当の農民の姿は、今も昔も変わらず、あらゆる商品のなかで一番安い値段で、一年間の血の出るような労働による作物を供出しているほろ／＼の姿である。「中略」永い戦争の期間を通じて一家の働き手を戦線に狩り立てられ、年寄や女手で辛うじてつくつた米を「聖戦完遂」の至上命令で二番米のはてまでもぎ取られて来た農民が、戦終つた今になつても、凡ゆる商品のなかで最も安い値段で供出した上に、なおかつ疎開者や買出人に貢ぐ余裕などあるはずがない。今日の都会人の空腹は、農民の強慾によるものでなく、逆に農民を踏台として強行された侵略戦争によるものである。

戦争によつて変わった都会人のイメージに反して、現実の農民は、〈戦前〉・〈戦中〉・〈戦後〉を通じ常に苛酷な労働と貧しさにまみれながら生きていくといふのである。

一九四三年一〇月、義妹高橋ミサオの住む秋田県平鹿郡横手町（現横手市）に疎開し、一九四八年三月まで農村生活を送った永之介は、「曾て私が胸に描いてゐた醇朴な農民の姿といふものも、そんなに多くは発見出来ません。むしろその反対の、心をゆるせないやうな百姓の方を、多く見かけるやうな気がします。」、「百姓といふものの性質に、好ましくないものを見出してゐるといふことだけは事実です。〔中略〕そしてそのもや／＼とした気持のうちには、百姓の濟度しがたいやうな頑固な性質とか、利己的な面とかが姿をあらはして来ることがあります。」（「東京の友への便り」、前掲「農民の幸福」という発言を繰り返している。その上で、「零細な農民の味方としての気持だけは、依然として変わりありません。」）（前掲「東京の友への便り」と断言するこの作家の描いた農民と彼らが暮らす農村の有様に、戦争前後の日本の見過ごされてきた一面を発見できる可能性は高い。

## 二 農地改革

第四回・第六回の芥川賞候補となった永之介の文壇出世作「梟」は、『小説』第一巻第七号（一九三六年九月一日）に発表された後、『文学界』第四巻第七号（一九三七年七月一日）に転載された。十五年戦争下に執筆・発表されたこの小説は、酒役人の検挙の様子から始まっている。

村人たちが大慌てで濁酒を隠したり棄てたりする様や、お作婆さんと地主の六兵衛に対する対照的な検査態度が記された

後、嬰兒の死体を茂みに隠して逃走する女としてお峰が現れる。彼女の状況は、もう一人の中心人物である與吉によって「亭主の新治郎はお峰が三人目の子を生み落すのも待たずにあの世に行つてしまつたが、間もなく生まれた子も二十日足らずで死んだことは與吉もうすうす知つていた」と間接的に紹介される。

後家となつたお峰は、地主の六兵衛に言い寄られ扶養を受けるようになる。死児を運んでくれた縁で親しくなつた與吉と關係を結ぶに及んで六兵衛を拒絶するようになるが、程なく與吉が濁酒密造の罪で労役場送りになると、再び六兵衛を受け入れてしまう。労役場を脱走してきた與吉と再会したお峰は、今度こそ六兵衛の世話にならぬと決心して、労役場に入るべく警察署に向く。

労役場の中でお峰は産気づき、市立病院に運ばれて無事女の子を出産する。十日程経つて、六兵衛が與吉毒殺を謀つたかどで捕まつたと聞いた彼女は、「喜びにかがやいた眼をきよろつかせ」て退院の準備を始めるのだった。

——亡夫の死児を棄てた女であつたお峰は與吉の子を産んだ女として再生したことになるが、明るい結末とは言い得ない。お峰には新治郎を父とする二人の子が、與吉には女工となつたキミエ以外に縊死した妻菊代を母とする三人の子がいる上に、今もう一人の赤子が誕生したのだ。濁密をしなければ生活できなかつた者同士が所帯を持つたとしても、「梟」の世界は解決しないのである。

表題の〈梟〉は、闇に紛れて密造酒を売り歩く者を指す隠語。ストーリーは、地主の六兵衛、夫を亡くしたお峰、彼女に好意

を寄せた與吉らの關係を軸に展開してゆくものの、一編の趣意は、違法行為と知りながらも濁酒密造をしなければ立ち行かない農村の実態を描くことにある。「酒役人」がまず登場する所以である。

お峰の不幸のそもその原因は、地主である六兵衛から小作地を取り上げられたことであつた。その結果、夫は病死。「六兵衛にいちめぬかれて来た」にも拘わらず、その財力と権力に頼らざるを得ないのは、「地主にたいする人格的服従まで余儀なくさせる」(『戦後日本農業史』、新日本出版社、一九九六年九月二〇日)地主制の特徴故のことである。

「梟」の書き手は、一六年後、農村の戦争後遺症を扱つた「なつかしい山河」(『改造』第三三卷第七号、一九五二年五月一日)を発表する。戦争終結を挟んでどのような変化が生じたのか、或いは生じなかつたのか。

舞台は、終戦直後の、鳥海山を遠望する出羽丘陵の麓、雄物川べりの盆地。ミナは、息子たちの帰りを待ちながら、四男卯四郎の嫁初江と孫の百合との三人で暮らしていた。

真つ先に帰ってきたのは、末子の勇助であつた。しかし一二月には卯四郎戦死の報が入る。農地解放の噂を聞いた勇助は、農作業に精を出す。そこへ総領朝太郎が帰還、主導権をめぐるトラブルが起きる。

旧正月が過ぎた頃、三男平三が戻ってくる。彼は、村政改革と村機構民主化の運動に参加、村長の不正を糾弾する村民大会開催のために奔走する。

そうしたある晩、卯四郎が生還する、戦死は誤報だったのだ。これで五人の息子が家に入ったが、ミナの気持ちは晴れない。工場に就職する五郎太以外は自活の見通しが立たず、後継者も未定なのである。

朝太郎が、勇助と初江との男女の關係を察知、不穏な気配が流れ始めた秋のこと。真夜中に酔つて帰宅した朝太郎が、迎へに出た初江に絡む。飛び出して行つた勇助に、朝太郎は馬栓棒を揮つて打ちかかる。が、形勢は逆転、滅茶苦茶に打ち据えられた朝太郎は土間に倒れ、明け方には息を引き取つてしまふのだつた。

——重要な変化は、やはり農地改革<sup>3</sup>である。これによつて農民は、「生産力を高めてえた成果をみずから取得できるような、自立的な条件におかれるようになる」(前掲『戦後日本農業史』)が、それは反面において、農家の零細化を促進したり、「なつかしい山河」が捉えたような家族間の主権争いを生じさせる結果をも招来した。何となれば、農地改革によつて土地の所有権は移動したものの、土地そのものが増えた訳ではなかつたからである。

さて永之介は、一九四九年九月一九日、秋田県湯沢市の農耕作家新山新太郎<sup>4</sup>に宛てて次のような封書を出している。

稲刈始まりましたか

別封で御作送りました。今度の秋田文学にのせたいと思いますので、なるべく二十五、六日まで届くよう秋田市榎山南新町里崎方金澤君あてに第四節以下に手を加えて送つ

て下さい（どうしても間に合はなければ今月いっぱい）  
□<sup>5</sup> 記手を入れようとかかつたが仕事の都合で出来なくなつたのです

尚いそがしいところ恐縮ですが左のことについて一筆急にお知らせ下さい

労力過剰失業時代では 次男三男以下兄弟が澤山居つて暮しに困る農家も多いことと思いますが 一町歩かそこの農家で 弟に田を分けるとか家をもたせるとかで家内にゴタ／＼の起るという場合もあるうと思ひます たとえばそういう農家で戦死したと思はれていた長男がヒヨツコリ帰つて来てみたら 弟が嫁をとつてあとをついでいたとか相續してしまつていたとか 或はまた先に帰つて来た弟が 坐りこんでカマドをおさえて動かないとか いうことでも兄弟喧嘩になつて血を見る騒ぎをしたなどという話もききますが、そういう労力過剰失業から来る小農家の家庭不和悲劇の実例の二三についてそのイザコザの模様をなるべくはしく知りたいのです

ここで問い合わせている内容が「なつかしい山河」のモチーフとなつてゐるのは明らかである。新山の返信は残っておらず本人の記憶も定かでなかつたため、いかなる素材がいかに小説化されたかを跡付けることは不可能だが、少なくとも永之介の興味の方向性は確認できよう。

### 三 近代化の影響

農村とその近代化をめぐつて、第二回新潮社文芸賞（一九三九年四月）を受賞<sup>7</sup>した「鶯」（『文藝春秋』第一六卷第九号、一九三八年六月一日）を見てみる。

キンが娘のヨシエの搜索を依頼しに警察署を訪れた。ヨシエは父無し子であつたのをキンが貰ひ受けて育てた養子だつたが、一〇歳になつた秋、実母のスギに連れ去られ曲馬団に売られてしまつた。紆余曲折を経て子供連れで清風館の女中をしていたところまではわかつたが、その後の消息は不明なのだつた。

キンは一夜を警察署で過ごした後、小説の表舞台から退く。鶏泥棒を働いていた間に女房を寝取られた喜助、モルヒネ中毒の女形にたぶらかされた作太郎、教え子の身売りを訴えに来た小野崎訓導、もぐりの産婆上田八重子らが引きも切らずに登場した後、ミヨが鶯を売りにやつてくる。横田医師との商談がまとまりかけた時、三好巡査が禁鳥であることを思い出す。言い争つてゐるうちに肝心の鶯が逃げてしまい、署内には哀愁のみが残る。

上田八重子を取り調べている最中に産気づいた女が駆け込んできた。三好巡査は、八重子に助けを求め、八重子は手際よく赤子を取り上げ、司法主任は「もぐり産婆でもこんなときは役に立つものだな」と喜ぶ。やがて出産を終えた女がヨシエであることが判明、首尾照応を見せつつ大団円に至る。

——単なる野鳥が商品になつたり禁鳥に指定されたりする点に、農村に押し寄せた近代化の一端を見ることがができる。司法

の番人が「もぐり産婆」に仕事をさせるというのも、皮肉の効いた設定であろう。小説が、八重子が警官たちに向かって「またいつでも用あつたら呼ばつて呉れせ」と叫んだところで結ばれているのは故のないことではない。「鶯」においては、農村の実態にそぐわない法の綻びが、或いは法で裁ききれない農村の貧しさが、さりげなく掬い上げられているのである。

警察署という設定は、『警察日記』（小説朝日社、一九五二年一月二〇日）の「後記」に、「鶯」では素描の程度にとどまった農民の苦い胸の底を、十分にたたいてみたい、田舎町の警察署の調室や留置場にごめく農民の姿を、まる刻りに描き出してみたいという要求は、その後も引きつづいて今も私のうちに燃えつづけている。」とあるように、戦後の「警察日記」や『刑務所志願』（山田書店、一九五五年一月三〇日）の原型となっている。

「後記」には次のような記述もある。

農民は決してシャチホクばつた理屈では、批判の声を発しない。その無残に踏みつけられたみじめな暮しの果ての、一見愚かな泣き笑いの身ぶり手ぶりによつて、農村社会の深刻な矛盾をバクロし、批判する。田舎町の警察署は、それが最も集約的に演じられる舞台である。

これが一九五二年の春に執筆された文章であること、から、農民の批判の現れ方や警察署の「舞台」としての役割に対する永之介の見方に（戦中）と（戦後）の別がないことがわかる。

次に、戦後の機械化に伴う悲劇を描いた「早場米」（『世界』第一〇四号、一九五四年八月一日）について。

千代松の息子宇一は戦死、嫁のキセと宇一の忘れ形見志郎の面倒を見てくれる婿を探していたところへ、復員してきた辰治郎が現われた。田畑を持たない次男であつた辰治郎は、抵抗なく婿に入る。

やがてキセと二人だけの農作業に限界を感じた辰治郎は、動力脱穀機、糶機、精米機などを買い揃えた挙句、三〇万もの大金を借りて自動耕耘機を手に入れる。確かに手間は省けるものの、借金返済のための質掘りに奔走しなければならなくなつた。

耕耘機を使い始めて二年目の秋、早場米の奨励金が出ることになり、辰治郎へ糶の依頼が殺到する。睡眠不足が続いていたある日、例によつて午前二時頃帰宅した辰治郎に異変が起きる。嘔吐、各部の激痛、そして意識不明。医者は、極度の過労による脳膜下出血と診断、絶望を仄めかした。

倒れて五日目頃、泣いているキセを薄ぼんやり見ている辰治郎は、「死ねば運命だべ、仕方ねえ、それ不足なら、俺の墓に入つて来い」と呟くのだつた。

——慢性的な貧困、徴用による人手不足、後継者の戦死、戦後の混乱と、暇なく痛めつけられてきた日本の農村に、機械化の波という新たな問題が生じた。これは農民の救世主然とした趣を帯びている点が厄介で、借金地獄の危険性を隠蔽しつつ、作業の合理化や負担の軽減化を謳う。

農地改革によつて自作農となつたが故の悲劇である点が、

「梟」や「鶯」との違いである。とは言え、「一見愚かな泣き笑いの身ぶり手ぶりによつて、農村社会の深刻な矛盾をバクロシ、批判する」(前掲『警察日記』「後記」という農民の在り方は、「早場米」にも一貫していると見ることが出来る。

#### 四 女性をめぐる状況

最後に、農村女性の描写について検討しよう。戦前・戦中期、東北地方の多くの貧農の娘たちが東海道に機織地に売られていった。彼女らは奥州っ子と呼ばれ、地元の女工よりも明らかに冷遇され酷使されていた。『鴉』(版画荘、一九三八年五月二〇日)は、その奥州っ子を題材とした小説である。

父專治の借金のため、濃尾地方の工場へ連れられて行った戸谷ナミの生活は熾烈を極めた。未明から綿埃を吸いながら働き続け、夕食にありつけるのは深夜二一頃。朝は実のない味噌汁、昼は沢庵二切、夜は一掴みのお菜に麦飯二杯という粗食。正に「織機のまわりをばたばたと駆け廻わつていなければならぬ鴉」なのである。

救いを求めるナミの手紙に急ぎ立てられて專治がやつて来るが、連れ帰りたいという願いは入れられない。專治は、ナミの代わりに、病に倒れた同村の娘ソヨを連れて戻る。

彼女を負ぶって雪の中を歩いていると、ソヨの父五郎七と出会った。何度も專治を陥れようとした五郎七だったが、事情を知って、「申訳ないな、なんとも済まねえな」と繰り返し詫げる。

——ナミを中心とした物語の裏面に專治をめぐる貧農の物語

が重ね合わされている点で、「梟」や「鶯」と共通の問題意識に基づいていると言える。

ナミのその後の物語としても読むことができるのが、「雪代とその一家」(『群像』第四卷第三号、一九四九年三月一日)。「戦中、戦後の農村を真正面から描こうとした」「伊藤永之介の戦後の代表作」(平野謙『日本現代文学全集89』作品解説、講談社、一九六八年七月一九日)と評された永之介の戦後文壇復帰第一作である。

機織工場に奉公に出ていた雪代が、「奥羽線もスツと北の端に近い故郷」に帰ったのは、シンガポール陥落直後の春のこと。伯母の養子勇四郎との結婚が予定されていたからであった。しかし、勇四郎は出征、ある吹雪の夜に、戦死の公報が入る。雪代は悲嘆にくれ、物思いに耽る日々が続いた。

やがて終戦。雪代の家にも、妹鈴江や弟英二が帰ってきた。喜びも束の間、英二は新しく購入したモーターの事故で亡くなってしまった。その冬、戦死した笹の勇四郎が帰還。彼は、雪代の心中を余所に、彼女の従妹ツルを嫁に貰ってしまう。鈴江も結婚し、雪代一人が取り残される。その上、耕作地が減り、雪代の手は要らなくなった。

雪代は、足かけ七年振りで機織工場に戻る。そこで働く娘たちの待遇は驚くほど良くなっていた。一カ月余りの後、鈴江からの手紙が届く。父銀蔵が、供出米の完遂と闇肥料に関わった罰金の支払いに苦しんでいる旨の文面に、雪代の胸は痛むのだった。

——戦争末期、企業整備や転業によって女工が不要になったのと農村の労働力不足とが相俟って、奥州っ子たちの帰農が促された。一九四三年一〇月に疎開した永之介は、娘たちが続々と村へ帰ってくるのを目撃している。10しかし需給バランスがとれていたのはほんの一時期で、終戦とともに村に男たちが戻ると娘たちの居場所は再びなくなった。「雪代とその一家」には、そうした時代の転変に翻弄される農村の娘の厳しい青春が臨場感を以て描かれているのである。

その一方で村に縛り付けられた女性もいたことを伝えるのが、「山の彼方」(『文藝』第一巻第九号、一九五四年八月一日)である。

二十歳になる和枝は、中川村の資産家と言われた朧山家に嫁いだ。人も羨む結婚であったが、和枝は朧山家に入った直後から下女のように働かされた。数年前の農地解放と財産税によって、朧山家は屋敷の修理も儘ならぬ状況にあったのである。

間もなく作男の銀次郎が暇を取るようになるが、それが嫁入り以前に決まっていたことが判明、和枝は、労力の埋め合わせのために給金を払う必要のない嫁を取ったのではと思ひ至り、愕然とする。

翌年、ひどい悪阻に苦しみながら田植えや草取りの重労働に耐えていたある日、和枝は、姑のタキから乾餅を盗み食いつた嫌疑をかけられる。翌日、着の身着の儘飛び出して生家に戻った彼女は、「おら、もう二度と朧山の家に行かない、二度と行かない」と泣き崩れるのだった。

——従来から農村女性は家事労働に加えて農業労働にも携わっていたが、戦争の長期化によって農村の労働力が不足し、女性の労働負担は増大していった。戦後、労働力が過剰になり「雪代とその一家」の雪代のように余計者扱いされるケースもあった反面、男性が戦死したり、家が没落したりした関係で、使用人代わりに酷使される女性も少なくなかったのである。

真夏の陽にジリ／＼と背中を焼かれて、もや／＼と湯気のような霧の立つている稲の中を、四つ這いになつて草をつかみ取つて行く顔は、カツカと火のようにほてり、滝のように流れる汗はとめ度がなかつた。菅笠にさら／＼と触れる剣みたいにとがった稲の先が、絶えずだら／＼流れこむ汗でかすんだ眼を、意地わるくチクリ／＼と刺した。腹が突つ張り、軀全体が石のように重くなつて来るのを、グツとこらえながら、ハアツ／＼と太息をくり返して、和枝はただ夢中に株間の草を掻き取り掻き取り、地を嗅ぎまわる獣みたいに這い進んで行つた。

右は、和枝が農作業をしている場面である。横手での疎開体験が生きている描写と言えようが、これを妊娠中の作業としたところに、女性ならではの苛酷さに対する書き手の意識が窺える。

また、縁談が持ち込まれた際の和枝の反応にも注意が必要。

「おら、まだ嫁になじり行きたくない」

去年ずつと奥の方に嫁入つた同級生の千代がこの旧盆に実家に戻つてきたときの急に五年も年とつたようなやつれた姿や、まだ嫁に来て間もない部落ちの誰かれの苦勞に類のこけた顔などが、急にいくつも眼に浮んできて、和枝はそういう境遇に自分を置いて見る気にはならなかつた。

結婚生活が苛酷なものとなるであろうことと同時に、彼女の体験が例外的なものではないことが暗示されているのである。

## 五 表層の変化と深部の不変

ここで取り上げた七編には、農地改革に伴うトラブル、機械化の陥穽、女性の立場と労働負担の変質、といった歴史化し難い戦禍とも言うべき〈戦後〉の問題と、〈戦中〉・〈戦後〉を通じて変わらない農村の貧しさ、封建性、強かさ、といった普遍的問題の両面が映し出されている。

永之介は、「田舎に住んで」（『東北文学』第一六卷第七号、一九四六年七月一日）の中で、農村に親近感を覚える理由の一つとして、「社会の基本的な階級としての農民を尊敬する私の根づよい観念」を挙げてゐる。また、描く対象として、知識階級や俸給生活者は「最も下積み之苦悩を嘗めてゐる農民ほどに、私の心を引くものではなかつた」し、「農村の中に居り、農民の身近くにゐるといふことだけで、心の落ちつきを感じてゐる。」とも述べてゐる。農民に向けるこころした敬意や愛情こそが、時代の推移に伴う変化を的確に捉えながらもその底流にある不

変を凝視し続けることを実現せしめた最大の要因であつたに違いない。

日本の近代文学は、西洋文学の強い影響下に出発した結果、主として個人的・内面的テーマの追求に動しむこととなつた。それに対し、永之介の農民文学とは、日本の近代文学が等閑視してきた前時代の面影を濃厚に宿す農村に、或いは集団としての農民に、日本及び日本人の本来の姿の一面を見出そうとする試みだつたのではないか。さらには、戦後、農村を捨てたり農村から追い出されて都市の住民となつた元農民たちや彼らの子供たちは、永之介の描いた農村世界と果して無縁なのか。そうした文脈に立てば、伊藤永之介作品群の内に、〈戦前〉・〈戦中〉・〈戦後〉という区分を超えた連続性を想定することも可能となるだろう。

注1 「文学的自叙伝」（『新潮』、一九三九年二月一日、後、『作家の

手帖／新選隨筆感想叢書』、金星堂、一九三九年六月二五日、

所収）

2 「搾られる百姓」（前掲『農民の幸福』）。ただし、この後、「しかし、それにもかかはらず「強慾」だとか「悪農」だとか、百姓を悪しざまに言ふ言葉を聞くと、私はいまだにいい気持がしません。」と続く。

3 第一次・第二次改革を経て、不在地主制の否定、在村地主の貸付地保有限度制定（一町歩）、地主による土地取り上げ禁止などを実現。一七〇〇年代初頭以来続いてきた地主制は解体



- 4 一九一〇年一月一〇日～一九九八年一月二三日。永之介との関係については、拙論「伊藤永之介と新山新太郎―未発表書簡群からの考察―」（『社会文学』第一三号、一九九九年六月一二日）参照。
- 5 判読不能。
- 6 「労力過剰失業から来る小農家の家庭不和悲劇」は、例えば末弟の梅四郎が満州から引き揚げてきたことを契機に土地の分配をめぐる生じた兄弟間の争いを描いた「谷間の兄弟」（『文学界』第七卷第三号、一九五三年三月一日）でも取り上げられている。
- 7 東京発声より映画化（監督豊田四郎、出演清川虹子、霧立のぼる、杉村春子）もされた。
- 8 普通、『警察日記』（小説朝日社、一九五二年二月二〇日）、『続警察日記』（角川書店、一九五五年八月二〇日）、『新警察日記』（新潮社、一九五五年九月三〇日）に収録された作品群を総称して「警察日記」と言う。
- 9 本文中の記載による。
- 10 「秋田から東海道への便り」（前掲『農民の幸福』）参照。

（秋田県立大学教授 平成元年度修了生）